



図書館だより

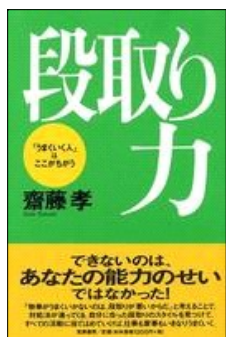


～心に刻もうたしかな1冊～



今年も『読書週間』の季節になりました。10月27日～11月9日（文化の日を中心に2週間）と定められ、日本の国民的行事として定着しています。図書委員会では、「図書館だより～読書週間特集」として先生方からたくさんの本を紹介して頂きますので、皆さんも読書の秋を大いに楽しみましょう！まずは第一弾をどうぞ

中原 昭校長



『段取り力』 齋藤 孝著（筑摩書房）

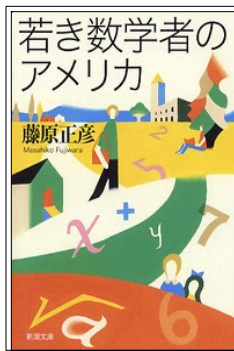
『人の能力に大きな差はない。ただ段取りのいい人と悪い人の差でしかない。』と著者は述べています。段取り力とは何か、どうやれば身に付くかなど・・・君達の高校生活に役立つヒントが網羅され、尚かつわかりやすく書かれていますので読んで実践して頂きたい。

矢野 正彦教頭

『若き数学者のアメリカ』

藤原 正彦著（新潮社）

国家の品格という作品で、藤原正彦さんの名前を知ったという皆さんが多いのではないかと思います。私は若き数学者のアメリカを読み氏の名前を知りました。同じ正彦という名前です。特に興味を持ちました。若き日に渡ったアメリカでの奮戦記がこの作品です。是非、藤原正彦さんの面白さを堪能して下さい。



長岡 浩事務局長

『こころ』 夏目 漱石著（岩波書店）

50数年前の高校の頃、いたく心に染みた1冊。他人のエゴに絶望し、自己に潜むエゴにも絶望し命を絶つという主題が、エゴを主張するのが何が悪いと開き直った昨今の社会で、なお多くの読者を引きつけている。そんな社会で人々は孤独に苛まれているかも知れない。そうなら漱石は普遍的なテーマを提供していたと言える。

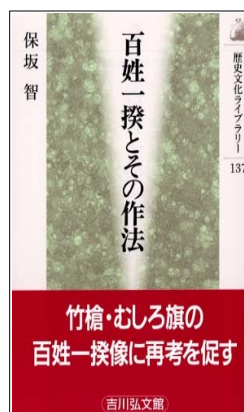


斎藤 繁樹

『百姓一揆とその作法』

保坂 智著（吉川弘文館）

著者は百姓一揆研究の第一人者で80年代から従来の定説、イメージを打ち破る新たな百姓一揆像を提示してきた。本書はその成果を一般向けに分かりやすく書いたものであり、専門家向けには『百姓一揆と義民の研究』がある。私が衝撃を受けたのは「代表越訴型一揆」が虚像であると論証している部分で、目から鱗が落ちた。



阿部 幸子

『細川ガラシャ夫人』

三浦 綾子著（主婦の友出版）

明智光秀の娘、そしてその名前に興味を持ったこともあって読んでみようと思った本です。著者初の歴史小説ということにも関心がありました。戦国時代の女性の立場、著者とのつながりのある宗教的なものと、いろいろ惹きつけられるものがあり、かなり前に読んだにも拘わらず



記憶に残っている本です。



鈴木 巳代治

『雪とパイナップル』

鎌田 實著（集英社）

心あたたまる大人の絵本です。夜、勉強の終わった後に、1人静かに読んでほしい本です。読む人の涙と感動を誘う作品です。ゆっくり読んで下さい。

伊計 昌代

『100万回生きたねこ』

佐野 洋子著（講談社）

100万回も死んで、100万回も生きたねこがいました。読む時の状況（年齢・環境etc...）、によって感じ方が違ってきます。あなたは今、この絵本をどう感じますか？好きな人がいる人、子供の頃にこの絵本を読んだことがある人、今の生活が少しも幸せではない人、自分を見失いそうになっている人に おすすめです。

